

## UMIN予算担当者として

東京外国語大会計課課長補佐  
元東京大学医学部附属病院管理課予算掛長

比田井 真

UMIN20周年おめでとうございます。

一介の事務職員の私に栄えあるUMIN20周年記念誌への寄稿依頼があった理由は、平成12年4月から平成19年6月までの約7年間にわたり、東大病院の事務部の一員としてUMINの予算を担当したということ以外には思い当たりません。

多分、地味な存在であったと思いますが、どこかで木内先生か関係のどなたかの記憶に残っていたのでしょう。

東大病院に勤務していたときは、会計課司計掛（後に予算係に名称変更、現在の経営戦略課財務担当）として各診療科（部）の予算配分と決算、概算要求などを担当していました。

UMINへの予算配分は、大きく分けて教官研究費と運営費で、研究費は平成13年度までは中央医療情報部の一部として一括して中央医療情報部へ配分していましたが、平成14年度に院内措置として「大学医療情報ネットワーク研究センター」が認められてからは中央診療施設の一組織として、当時は助教授だった木内先生の助教授1名分を予算配分しました。

運営費は、医療情報ネットワーク経費、トランスポンダ借料、電子計算機等借料でした。

平成15年度の概算要求では、中央医療情報部の廃止・転換により「企画情報運営部」と「大学病院医療情報ネットワーク研究センター」が設置されました。

この措置により、これまで中央医療情報部の一部であり、院内措置であった大学病院医療情報ネットワークが名実ともに組織として独立したのです。同年度には「臓器移植医療部」も措置されました。

私は予算係長として概算要求を担当していましたが、東大病院に異動してきた当初は、UMINが「ムーミン」に聞こえ、「ユーミン」と言われて松任谷由美のことではないだろうがはて？というレベルでした。そんな者が概算要求を担当したのですから、木内先生も大変だったことと思います。

概算要求には文部科学省からの質問（宿題）が付きものですが、先生には、度々の質問に対して、その都度回答を作成していただきました。専門外の人間に対して短い時間でわかりやすい資料を作るということはなかなかむずかしいものですが、多忙な研究・業務活動のなか、厳しい回答期限にも関わらず、いつでも協力的に資料を作成していただきました。その期間中は、何度も企画経営部に顔を出されて回答への反応を聞いてくださり、ずいぶん助けていただきました。

国立大学法人化後は、補助金として渡しきりの運営費交付金のなかで、全国共同利用機関としての予算を確保しなければならず、何度も心配顔で相談にいらしたのが印象に残ってい

ます。

また、毎年の会計実地検査や外部の賓客がUMINセンターを視察する機会が何度もありましたが、木内先生の大変わかりやすい説明で、担当としては安心して案内することができました。

予算関係以外で私がUMINセンターの実際の仕事に関わったのは「病院資料」の文部科学省納品だけでしたが、そのときを含め、予算とUMINセンターとの細々としたやりとりでお世話になった飯野さんが印象に残っています。

梱包された「病院資料」を台車一杯に積んで運んでくる姿を見て、あの細い体でどこからあのバイタリティが湧いてくるのか不思議でした。通勤途中もよく見かけましたが、その静かな雰囲気は仕事と全然違うので、見てはいけないものを見てしまったような気がしました。

東大病院から東京外国語大会計課に異動して1年以上経ちました。

今もUMIN電子メールサービスユーザーとして自宅と職場にメールを転送しており、大変重宝していますが、UMINメールが現在、東大との唯一の直接的な関わりになっており、そこから20周年記念行事の案内をいただくことになったことに、なにか不思議な因縁を感じています。

末端ユーザー、そして元予算担当者として、今後のUMINのますますのご発展を府中の森からお祈りしております。